

今
朝
の
露

八十歳も二十歳も一期 今朝の露

呼吸音のみなれど 部屋中に気配あり

秋の日高く 病室明るく輝らす

微かに喉元が足が 礼をいう

爪桜色にして 肌柔く白く透く

風邪か疲れか 神経剥き出しとなる

眠れぬ夜 怯えるものなどなしと思えど

強がりをいいし吾なるに 役立たずあり

一人風邪を引き込み 点滴にすぎる

怖れることなきに 体の芯が反応する

大根撒く 白く乾ける土に

朱の大根の種 指先からこぼれる

畝々に種あり 朱の列となり

選挙かまびすし 政権揺らぐか

栄枯盛衰を 一票が演出する

秋の空となる 飛行機雲流れ

歩み出で 秋の気に抱かれる

鯉浅瀬に三尾 秋空の下

雨風地震のみ 夏去りゆく

広い空間生まる 剪定の跡

土に出で土に戻るのみ 老農カラリと笑う

畦道を老婆の腰が 揺らぎゆく

母老いし 八十の坂揺れのぼる

住居跡とりつく島なし 藪の丈

鳴かぬまま 蝉落ち水に曳かれゆく

盂蘭盆会 雨降り蒸され始まりぬ

香焚き鉦打ち ゆかしき人の名を呼べる

生前と今を分かťは いかなるや

提灯の光舞う 異空間に誘うごと

線香の香ゆるりゆるりと 部屋に満つ

木酢撒く 黴食う部屋の隅々に

部屋湿り 黴の食う音鳴り止まず

秋蟬の うっそり椎の洞にいて

淀みに鯉浮く 腹を見せ

止まらぬ汗のままなれど 電車来る

書評あれば 拾い読む吾になり

書評全てに 背を向けていた三十年

書き進む一字が かく難しきとは

人として書くべし 人であれば

空疎な理屈 並べきたりし吾は

四囲に塞がる 湿度という重きもの

降り込められて二月 呼吸困難に喘ぐ

徹這い尽くす恐れに 昼寝覚め

降り続けば 息苦しきただ募る

蝉の声止み 雨しとどに降りしぶく

街を濡らし線路を濡らし 雨止まず

雨の中鴨の群れ滑空す 橋の下

吹き降りとなる 信号一つ変わる間に

降る 蒸し風呂のごとき部屋包み

吹き降りの間も 駅の清掃続くらし

川面を蛇ゆく ぬらぬらと波に乗り

糸とんぼいて にわか炎熱の兆しあり

炎熱の瘴気を 遠来の客持ち来たる

触れ合う背中を 汗まとわり濡らす

汗伝う腕や肘 やり場なきまま立つ

南風強く 構内に砂塵舞い走る

若葉茂る構内 昼休み群れをなす

木造建物佇む 百周年近しと

赤い屋根葺き替えたる 二三か所

留学生屯す 七夕飾りに

宗教にしかず と合評会荒るる

見ゆるものの他になし と師言い募る

見ゆるもの触るるもののみ さなれど

虚空にもものいう 虚空に光れるあれば

師の亡骸に見えしとき 赤きもの走る

憂えても甲斐なきこと 憂えるは如何

己が胸に聞けば おおかたはわかること

いたずらに己を責む 悔い深まる

他と引き比べ 嘆くは愚の極みなり

己が己に口出す 愚かさゆえ

篠つく雨直に降る 軒端動けず

傘の甲斐なく 芯まで濡れとおる

叩き付ける雨に 川轟き流れ

川中の木々強かに立つ 柳なれば

紫陽花清し 白雨したたかに受けれど

記録的雨量という トップニュースに

鴨喜び走る 嵩増えし川に三四羽

驚舞い飛べる 濁流となりし川の上

今日も皆無口で 窓打つ雨を見る

地震小刻みに発生す 雨を連れ

巢立つ子を思うに似る 冊子棚にあり

誌の評どう広がりゆくか 流れに委ねる

次号への思い馳す 書棚の前で

夜半の地震に驚く 震度三なれど

子の声トーン上がる 転居はベターと

驚しとどに濡れ 走る水辺に立つ

ペッドボトルが空き缶が 濁流にゆく

茅草水流に靡き わらわら音たてる

風雨激し 道に動けぬ二三人

天のバケツをぶちまけたるか 悪童が

傘を突き抜け 雨粒頬を流る

雨強ければ 川にわか騒ぎたつ

寸刻の後 道を濁流が呑む

パソコンの不具合に 終日付き合う

初期化のほかなし このパソコンは

グズ濡らさぬよう 発送準備へ

明るいブルー地に 題字の赤鮮烈

真剣な眼差しで 誌の表紙を開く

文字を追う 無言の目が光る

誌の発送準備終え 印刷所軽やかに出る

明日は良いことがある 義母の口癖

強く思えば 山も空も動くという

健康診断 講堂にいくつもの関わり

趣旨はいかなるや 健康診断問答あり

しどけなく流れ散りゆく 飛行機雲

運勢占いを見る 座興なれども

占えば 十七歳とあり我が精神年齢は

諸事進歩なしと運勢にあり 一人首肯す

梅雨入り宣言 難題を抱えし日に

蒸し暑さが纏わりつく 西日激しき

歳重ねるは 童に近づく証なり

人間というは 人である間のこと

奇跡かと思う 人に生まれしこと

深呼吸し 胸の蟠りを掻き出す

大空に委ね 我はなきものになる

ブーゲンビリア 構内の玄関先に群生す

離職というは 解雇ということらし

この寒き空に 職解かれ投げ出さる

今嘆くならば なぜ日々辛抱できぬ

人のせいにあらず 汝が蒔きしこと

駅に向かい 萼紫陽花に迎えられる

急ぐ足に 萼紫陽花の静よろし

萼紫陽花 一群の風となり涼し

今朝もマスクの子に会う 踏切で

電車雨の鉄橋を渡る 音もなく

紫陽花清し 雲低けれど

葉の潔さ思う 紫陽花見れば

雨粒を溜め 虹の色新たなり

虹かかる 豊後高田のあたりにて

神域より出し水 澄みて流るる

神域に立ち ネガの如くに見透かされ

光のシャワー浴びたし 社殿にて

光浴び 真白くなりたし内も外も

微かに過ぎるものあり 六月の夜

夜半になり 蛙激しく鳴き交わす

一日怒ることなし 努めてみれば

定期券買う 時間勤務なれども

責任軽き職なれど あなどりがたし

真夏かと思う 光激しく照り返り

旅客機消息絶つと 臨時ニュースが

髭を剃る 起きがけの不機嫌癒えぬまま

肌弛みいる 鏡に六十の男ありしが

人を詰れば 同じ思いで詰られる

十七の心に いざ戻ってはみたれども

木の花白し 雀来て啄む

売場にマスクなし 皆領き去る

マスク手洗いうがい 励行せよと

除菌強ければ 人も棲みやらず

冤罪ということ DNAが明かす

十七年という 時をどう裁けるや

気持ち荒む朝 世界のニュースに

核実験ミサイル発射 世の陰り見ゆ

我が儘の論理通し 痛み知らず

人類冬に入る 国益のみ主張するか

高層ビルの間を 空風吹きゆく

スタンドの旗 強風に巻かれ落つ

トタン剥ぎ 風なお怒り止まず

風に向かい 川べりを斜めにゆく

電車這い來たる 強風の中

携帯耳元で鳴る 満員電車

文芸の徒は 火の道をゆけるか

明暗を分けし 我がストーリー中なれど

風雨激し 季節一氣に戻る

求人率最低と トップニュースに

雇用なしという 世のいずこにも

突如雨降りくる 日射しあれど

からりと雨あがり 新芽まぶしき

新芽さらさらと舞う 霧雨の中

昇る日射しくる フラッシュのごとく

遮光カーテンに 日の束カッと燃ゆ

パソコン設定す 五月の光受け

新しきパソコン 軽やかに息吹きあげ

静かに降る 五月の雨に和みいて

雑巾掛けする 五月の窓開け風を受け

椿の新芽 縁の下から伸び出でる

原稿の版組む 深夜となる

版組のこと考えている 夢にまで

猫の声聞かず 一月になる

馳なるか 今庭過ぎりしは

疾駆するものの影 目の内にあり

五月の雨霧のごと舞う 風の中

傘さし自転車こぐ 風を受け

木の花たわわに咲く 庁舎の庭に

稜線低くおぼろに 五月萌ゆ

めぐり来る季節 正確なるを謝す

子らの声なし インフルエンザ拡大へ

感染者増えゆく 新型インフルエンザ

停留という隔離あり ウイルスなれば

夜明け前に起き のぼる日を待つ